

素足で踊る舞踊のための身体運動の技術としての

## 「 回 転 」

堀切 紘子

### [序]

舞踊創作の周辺、特に身体運動の技術について種々述べられてきた貴重なデータがあるが、この報告では、「素足」で踊るという特性を基に、現在まで、以下のように、素足で踊る舞踊のための身体運動の技術について述べてきた。即ち、「足と脚の動きの関連」(91)、「肩と腕の動きの関連」(92)、「上肢と下肢の動きの関連」(93, 94)、「腕と脚の同側・同方向の動き」(95)、「歩行」(96)についてである。それら一連を踏まえて、本報告では、舞踊にとって彩りをゆたかにする「回転」の動きについて考察する。

### [本論]

起立位・水平面での明確な方向は、「前後・左右」の4方向であり、さらに、その2軸に区切られた「斜め方向」が無限にある。

起立位・その場での足の動かし方は、踵を中心点に「外輪」に動かす、爪先を中心点に「内輪」に動かすの2種である。これが、「方向転換」という動きの生ずる出発点であり、持続することで「回転」の動きに発展するものである。—①

そこから、その場での「方向転換」を持続する2種の足(脚)の動かし方、つまり、「前回転」と「後ろ回転」を生み出す動きが生じ、双方とも反対側の腕と脚の動きが連なって現れる。—②

今、右足の踵を中心点に右足を「外輪」に「方向転換」させ続けると、右への「前回転」が現れ、左足が従う足として働き、同時に左腕が「回転」の方向に現れる。次に右足の爪先を中心点に右足を「内輪」に「方向転換」させ続けると、左への「後ろ回転」が現れ、左足が従う足として働き、同時に右腕が「回転」の反対方向に現れる。

次に、さらなる2種のその場での足(脚)の動かし方、つまり、動かす足をもう一方の軸になる足に掛けての「前回転」と「後ろ回転」を生み出す動きも生じ、この場合、双方とも同側の腕と足の動きが連なって現れる。—③

今、右足を左足の爪先前に掛けるように「内輪」に動かし「方向転換」させ続けると、左への「前回転」が現れ、中心点は軸足である従う左足の爪先にあり、同時に右腕が「回転」の方向に現れる。次に右足を左足の踵後ろに掛けるように「外輪」に動かし「方向転換」させ続けると、右への「後ろ回転」が現れ、中心点は軸足である従う右足の踵にあり、同時に右腕が「回転」の方向

に現れる。

以上はその場での足の動きから生じる4種の「回転」の動きを述べたものだが、加えて視線と首の動きが重要であることは言うまでもない。

さらに、その場での「外輪・内輪」の足の置き方から発展し、足を移動させることによって、足と脚(股関節)の弧を描く動きが生じ、基本的な2種の弧が得られる。一つは、動かす足の側に描かれる弧であり、もう一つはもう一方の足(脚)に掛かるように描かれる弧である。—④

今、右足を右斜め前の弧の延長上に動かしてその方向に「方向転換」をすると「右前回転」が現れ、右斜め後ろの弧の延長上に動かしてその方向に「方向転換」をすると「左後ろ回転」が現れる。この時反対側の腕と脚の同方向への動きが現れる。次に、右足を左足(脚)に掛けるように左斜め前の弧の延長上に動かしてその方向に「方向転換」をすると「左前回転」が現れ、右足を左足(脚)後ろに掛けるように左斜め後ろの弧の延長上に動かしてその方向に「方向転換」をすると「右後ろ回転」が現れる。この時は同側の腕と脚の同方向への動きが現れる。

さらに、この2種の弧の動きから発展させると、可能な各方向に「回転」を試みることができ、動きのゆたかさを加算できる。—⑤

今、右足を例に、動かす足の側に描かれる弧からの発展では、左斜め前、前、右斜め前、右の4方向へ「右前回転」が生じ、次いで、右、右斜め後ろ、後ろの3方向へ「左後ろ回転」が生じ、この時いずれも反対側の腕と脚の同方向への動きが現れる。また、同様に、右足を例に、動かす足のもう一方の足(脚)に掛けるように描かれる弧からの発展では、左斜め前、前、右斜め前、右の4方向へ「左前回転」が生じ、次いで、右、右斜め後ろ、後ろの3方向へ「右後ろ回転」が生じ、この時いずれも同側の腕と脚の同方向への動きが現れる。

### [結]

このように、その場で始まる足の動きから発展して、「前回転・後ろ回転」の動きが生み出され、さらに、水平面(床面)での方向を加味すると、より一層「回転」の動きがゆたかになり、素足で踊る舞踊創作の展開に寄与するものと思われる。